

巻頭言

十八歳の春

小林俊行 大学院数理科学研究科副研究科長

探し物をしていたら、引き出しの奥から一枚の黄ばんだ紙が現れた。勢いのある筆致で次の二文が紙一杯に大きく書かれている。

数学は一つの問題を一週間でも一か月でも考える事ができるということが大事である。
知識はあとからいくらでもつく。

十八歳の私の字であった。

東京で下宿を始めて一か月ほど経った頃、本郷キャンパスの五月祭に足を運んだ。数学科の展示は、模造紙に二十題ほどの問題が並ぶという、実に素朴なものだった。一題解くごとに「東京大学数学科」と刻印された鉛筆が一本いただけという。私は学園祭のあいだ、その問題群に没頭した。解き終えて展示場の四年生に報告すると、「これらの問題の多くは三年生の古田君が作った」と教えられ、紹介していただいたのが古田幹雄さんである。自分の解答を説明して鉛筆を二箱いただき、そのあと、勇気を奮って数学の学び方を尋ねた。

古田さんは当時すでに数学界で名の知れた存在で、小学生のころランドセルに高木貞治著『解析概論』を入れていた、という逸話まで語られていた。高校時代の私はスポーツこそしていたものの、数学については『解析概論』という書名すら知らず、大学数学の知識など皆無であった。そんな十八歳の春に、「知識はあとからいくらでもつく」という言葉は、焦りがちな心をそっと支えてくれた。また、「一週間でも一か月でも考え続ける」姿勢は、十代のうちに自然と身についた大切な習慣となった。

それから六年後、私は修士課程を終えて東大に奉職し、以来四十年近くの大部分を、古田さんと同僚として多くの時間を過ごすことになった。十八歳のときに憧れた古田さんの言葉はいまも座右の銘である。一方、同僚となつてからは、古田さんが私の院生セミナーに出席された折に「小林さんのセミナーは薫風を感じます」と言われて驚いたことがある。またある日、古田さんのオフィ

数学は一つの問題も
一週間でも一か月でも
考える事ができるという
ことが大事である。
知識はあとから
いくらでもつく

スを訪ねた際、拙文『創造力の源泉』(時に沿って・教養学部報)のピーが黒板に貼られているのを見て、あらためて驚かされた。

どこかで、続いていくもの、つながっていくものを感じてくださったのかもしれない。

春になると、希望と不安を胸に抱いた新入生たちが一斉に駒場キャンパスに現れる。その姿を見るたび、自分自身の十八歳の春がふと、みがえる。冒頭の紙片は、当時三年生の古田幹雄さんの言葉を、下頁に戻るやいなや書き留めたものである。十八歳の春に古田さんからいただいた言葉が私を励ましたように、いま春を迎える後輩たちに、少しでも未来への光となる言葉を手渡せればと思う。